



変わり者と呼ばれた貴族は、 辺境で自由に生きていきます 2

ALPHAPOLIS

塩分不足

enbunbusoku

サトラ

包容力のあるお姉さんメイド。
水に濡れると人魚になる。

ニーナ

元気いっぱいの子犬メイド。
サボり魔で楽天的な性格。

ホ回ウ

元奴隷の獣人。
ウィルに雇われてメイドとなる。

ソラ

ウィルに長年仕えている少女。
表情に乏しいが、非常に有能。

イズミ

集落最強の戦士で、
もの静かな性格の犬獣人。

ユイ

三千年を生きる最古の吸血鬼。
ウィルを技術面で補佐する。

ウール

大貴族グレーテル家の三男。
魔法を使えないが故に冷遇され、
辺境の領地を与えられる。

ヒナタ

ウィルと不思議な縁を持つ、
謎の狐獣人の女の子。

Main Characters

主な登場人物

1 極寒の雪山

名門貴族の三男に生まれたウィルこと僕、ウイリアム・グレーテルには魔法の才能がない。

幼い頃にそれを知った僕は、生きる気力を失ってしまったんだ。だけど、そんなとき亜人の女の子に励まされ、元気をもらった。

それから亜人種に興味を持った僕は、彼らが誕生した理由を調べ始めた。

世間ではのけ者扱いの亜人だけど、過去に亜人の女の子に助けられた僕は、彼らにも分け隔てなく接した。魔法の才能がないことも相まって落ちこぼれ、変わり者なんて呼ばれていたよ。

そんな僕も十八歳になり、グレーテル家の習わしで領地をもつことになったのだけど……そこは屋敷以外何もない荒野だった。

過酷な状況に落胆しながらも、僕は亜人たちが自由に生きられる街を造ることを決意

する。

かくして僕は、今まで隠してきた【変換魔法】という力を駆使して、枯れた大地を復活させたり、様々な施設を造ったりした。

大変な作業だけど、心強い味方になってくれた人たちもいる。

僕の相棒的な存在で、亜人種の研究も協力してくれている神祖と呼ばれる世界最古の吸血鬼、ユノ。

幼い頃から僕をそばで見守るメイド長のソラ。

元氣いっぱいの猫獣人メイドのニーナ。

みんなのお姉さんの存在のサトラ。

しつかり者エルフのシーナと最年少メイドのロトン。

そして、奴隸として売られていたところを助けた狼獣人のホロウ。

そこへ新たに加わったドワーフのギランや、たくさんの仲間たちと一緒に、理想の街を目指して毎日奮闘している。

そんなある日のこと。

ソラや他のメイドたちに声をかけ、最後に研究室にいるユノを呼んだ。彼女たちを食堂

に集め、話を始める。

「そろそろ領民探しを再開しようと思うんだけど、どうかな？」

「僕が今すべきは、領民を新たに引き入れることだと思った。エルフ、ドワーフと順調に集められているし、街造りと並行して領民も増やしていきたい。僕がそう提案すると、ソラが頷いてから言う。

「良いと思いますよ。ドワーフの方々の助力もあって、街造りを進められるようになりましたから」

続いてニーナが声を上げる。

「あたしもさんせいー！」

「あとはどこに行くか、ですね」

そうサトラが言った。僕はその言葉に頷きながら、みんなを見回して尋ねる。

「前みたいに誰かの故郷を探そうと思ってるんだけど、この中に我こそは！ って人はいないかな？」

「あの——」

最初に反応したのは、意外にもホロウだった。

てっきりニーナあたりが元氣よくフライング気味に名乗り出るかと思ったけど。

「もしよければ、私の故郷へ一緒に行ってほしいです」

「ホロウの故郷って、確かずっと北の方だよね？」

「はい。雪山が並んでいる地域で、そろそろ来るんです」

「来るって何が？」

「大寒波だいかんぱです。私の故郷は元々寒くて、今でも気温は氷点下の日が続いています。そこに追い討うちをかけるように、毎年九月の初めくらいから特大の寒波が来るんです」

「そ、それって大丈夫なの？」

「はい、なんとか。私の一族は寒さに慣れていきますから。それでもギリギリ耐えられるレベルなので、とても人間に耐えられる寒さではなくなりますが」

だから向かうのであれば、寒波が来る前にしてほしい。そうホロウは言った。

今はまだ八月の下旬。彼女の言う時期まで、一週間も残っていない。寒波は年を越こすまで続くらしく、ここを逃すと来年になってしまう。

「そういうことなら決まりだね。次に行くのはホロウの故郷だ」

「よろしくお願いします」

ホロウは頭を下げた。

「こっちこそ案内よろしくね。ユノも頼たのんだよ」

「うう……ワシ、寒いのは苦手にがてなんじゃがあ〜」

「たくさん着こんでいけば大丈夫！」

「ほ、本当じゃろうな？」

ユノは半信半疑はんしんはんぎの様子だった。

出発は明日の早朝。僕たちは今日のうちに寒さ対策を十分に済ませ、極寒の地への旅に備そなえた。

そして次の日の朝。

天候は快晴だ。

「そういえば、この地域も来月から一気に寒くなるんだったね」

僕の言葉にソラが頷く。

「確かそのはずですね。ウィル様たちが北へ向かわれている間に、こちら寒さに備えて用意をしておきます」

「うん、よろしくねソラ。さて、ホロウ、ユノ、準備はいいかな？」

「はい」

「ふ、服が重いのじゃ……」

ホロウはメイド服の上から毛皮のコートと帽子を着用。僕とユノは、彼女よりさらに分厚いコートを着て、手袋までして完全防備だ。寒がりのユノにいたっては、コートの中にもう一枚暖かい服を着ている。

「これで耐えられなかったらワシ、冬眠するからのう」

「冬眠って……熊じゃないんだから」

「そのときはおぶって運んでくれ」

「ちゃんと自分で歩いてよ……」

そんなやり取りを終えて、僕はユノが作り出した扉の前に移動する。空間魔法を使える彼女は、現在地と遠く離れた場所を繋げることができるのだ。

ユノが繋げてくれた扉の先。

僕も行ったことのない場所だから、少しワクワクしている。

「じゃあ行こうか」

僕が扉を開け、二人が後に続く。抜けた先に広がっていた景色に、僕らは固まった。二重の意味で固まった。

「寒っ！」

僕とユノは思わず声を上げた。

一面、雪化粧した森に、僕ら三人はポツンと立っている。

壊れた建物の壁に付けられた扉がある。寒さに慣れていない僕とユノは、気温の落差に身震いした。

「なんじゃここは！ もう寒いぞ！」

「ええ？ ユノは来たことあるんじゃないの？ この扉付けたのユノでしょ？」

「こんな寒い場所なんて知らんぞ！ そもそもこのあたりを訪れたのはうん百年前じゃ！」

「その間に気候が変わったのかな？ ホロウは大丈夫なの？」

「これくらい全然平気ですよ。私の故郷はもつと寒いですから」

「こ、これより寒いじゃと？ ワシはもう無理かもしれん……後は頼んだのじゃ」

「諦めるの早いよ！」

ツツコミを入れた僕も、予想以上に寒くて驚いていた。今の気温はどのくらいなんだろ？ ゼロ度は超えていると思うけど……

「ここからさらに北か……結構移動しないと駄目なんだっけ？」

ホロウが頷く。

「はい、おそらくまだ遠いです。私はこの森を知りませんから」

「なら歩こう。ほら、ユノも行くよ」

「おぶってくれ〜」

「駄目です」

情けない声を出すユノ。

彼女の手を取って引きずるように、僕は北を目指して歩を進める。

ホロウの故郷は、王国からずっと北に向かった山奥にあるらしい。

そこはどの国にも属しておらず、ホロウは自分たち以外の種族が住んでいるのを見たことがないと言う。

その理由は単純で、普通に暮らせるような環境ではないからだ。

もっと具体的に言うならば、気温が低すぎる。一番暖かいときですら、氷点下マイナス三十度。大寒波に襲われている九月以降の四ヶ月間は、平均マイナス八十度前後という話だった。

「マイナス八十度って……地獄じゃろ」

「ホロウは平気だったの？」

ホロウに質問を向けると、彼女は笑みを浮かべて答える。

「はい。私たち狼人族は、獣人の中でも寒さに強いですからね」

「いや、強いとかそういうレベルではないぞ……もしかして主、氷結系の魔法とか効かな

いのではないか？」

「ま、魔法ですか？ それは試したことがないのでなんとも……」

二人の会話に僕は口を挟む。

「それよりこっちで合ってるの？ さっきからホロウに案内されるままついてきてるんだけど」

僕らは現在、出発地点から北上を続けていた。

辺りの景色は依然として白一色。心なしか寒さが増しているようにも思える。途中でホロウが先頭に立ち、僕らを先導してくれていたんだけど……

「はい。知っている道に出たので大丈夫ですよ」

「そうなんだ」

僕にはさっきまでとの違いがわからないが、自信ありそうだし大丈夫かな。それより心配なのは……隣でブルブルと体を震わせているユノだ。

「ユノ、大丈夫？」

「これが大丈夫に見えるのか？」

「いや、ごめん。全然見えないから聞いたんだけど」

「なら見ての通りじゃ。寒すぎて無理……耐えられる気がせん」

「そ、そっか……ホロウ、あとのくらくらいかかるかわかる？」

「まだずっと先です。この森を抜けた先に山があるので、そこを越えてさらに奥。もう一つある山の中腹に、私の故郷がありますから」

思った以上に遠いらしい。そして、どんどん寒さが増しているように感じるのは、どうやら錯覚ではないようだ。

山に近づくにつれ、気温が急激に下がっていつている。

「ウイル様、山が見えてきましたよ」

ホロウが斜め上のほうを指差す。木々の合間には、うっすらと山の輪郭のようなものが見える。

「えっ、もしかしてあれ？」

「はい。雲がかかっているようですね」

雲のせいなのか。

ほとんど輪郭しか見えないし、どれだけ高いのかもわからないぞ。ただ確実に言えるのは、あの山は今いる場所よりも寒いということだ。

「……これは、僕らも覚悟を決めなきゃ駄目だね。ほら頑張るよ、ユノ」

「嫌じゃあ……帰りたい」

ここまで弱々しく嫌がる彼女は、これまで見たことがない。

それほど寒さに弱かったのか。

とはいえ、ここで引き返すわけにもいかない。

ホロウも言っていたが、今の時期を逃せば来年になってしまう。ユノもそれはわかっている。だから、嫌だ嫌だと言いながらも、僕らについてきているんだ。

そうして進むこと三十分。僕たちは山のふもとに到着した。

寒さはさらに増している。

見上げると、山の頂上が雲に隠れて見えなくなっていた。

「随分高いね……これを登るの？」

僕はホロウに尋ねた。

「はい。さすがに頂上まででは行きませんが、中腹くらいまで登ってからグルリと回ります」

中腹って、どの辺りを指しているんだろうか。

そういえば、雪山の登山なんて生まれて初めての経験だ。大変だとは聞いているけど、実際はどれほどなんだろう。

それをこれから体験するのか。

「……よし」

僕は覚悟を決めて一步を踏み出した。

雪山育ちのホロウは、難なく登っていく。

置いていかれまいと頑張る僕とユノ。

体力には自信があつたけど、次第に息が上がってきた。

柔らかい雪道、かつ斜面なので、簡単に足を取られてしまう。

そこに気をつけて進んでも、問題なのは寒さだ。

山を登り始めてから、明らかに気温が十度くらい下がっている……気がする。

瞬きを細かくしてないと、痛くて目が開けられない。呼吸をするたびに冷たい空気が

入ってきて、肺がキリキリと軋むように痛む。

そして寒さは全身の動きを鈍らせる。筋肉が強張ってしまい、上手く使えなくなる。体

感的には、いつもの三倍は疲れやすい。

「はあ……はあ……」

「ウィル様、大丈夫ですか？」

「うん……僕はなんとかね」

疲れは感じているけど、動けないほどではない。

しかし、彼女は限界に達していた。

バタンッ——その音に後ろを振り返ると、ユノが倒れ込んでいた。

「ユノ？」

「ユノさん！」

急いで駆け寄り、ユノを抱き上げる。

脈と呼吸を確認すると、どちらも正常だった。

「大丈夫なんですか!？」

「うん、眠っているだけみたい。ユノ！起きてユノ！」

声をかけ、頬を軽く叩いてみる。

しかし、起きる気配はまったくなかった。これは良くない事態だ。彼女が眠ってしまったら、屋敷と先ほどの扉を繋げる空間魔法が使えないので、一旦屋敷に戻るといふ選択肢がなくなる。

そして、状況はさらに悪化していく。穏やかだった天候が急激に荒れ始め、視界が遮られるほどの吹雪となったのだ。

「こ、これはさすがに……」

「ウィル様！あそこへ避難しましょう！」

ホロウが示した先には、微かに穴があるように見えた。僕は眠ったままのユノを抱きかかえ、ホロウと一緒にそこへ向かう。雪に覆われた山肌に、小さな穴が空いていた。穴へ駆け込む僕とホロウ。

穴の中は道が続いていて、二十メートルくらい進むと突き当たった。僕はそこでユノを下ろし、変換魔法で薪を生み出して暖を取ることにした。

「ウィル様、ユノさんは大丈夫なんですか？」

眠るユノを心配そうに見つめるホロウが、僕に尋ねてきた。

僕は軽く頷いてから答える。

「心配ないよ。ただ眠っているだけだから」

神祖であるユノは不老不死の存在だ。魔力が尽きない限り死ぬことはない。

しかし、無敵というわけでもないから、こうして寒さにやられるとダウンしてしまう。

この様子だとしばらく起きそうにないな。

「困ったなあ……ユノが起きてくれないと、屋敷にも戻れないよ」

「ならもつと暖かくすれば」

「そうしたいんだけど、薪で起こせる熱には限界があるんだよ。それに洞窟の中なのに、

外とほとんど寒さが変わらないから、この雪山を抜けない限りは難しいかな」

「ですが、この吹雪の中を進むのは危険すぎます」

「うん、しばらくここで待機だね」

外は猛吹雪が続いている。

視界は悪く、凍てつく寒さが襲いかかってくる。

ユノがこの状態じゃ戻ることできない。

そして、進むこともできない。

有体に言くと、僕たちは雪山で遭難してしまったというわけだ。

一時間後――

吹雪は一向にやむ気配がない。

それどころか、さらに悪化しているようにも思える。

僕は薪に触れそうになるほど近づいて、体を震わせながら寒さに耐えていた。

「私のコートをお貸ししましょうか？」

「駄目だよ。君は寒さに強いだけで、まったく影響されないわけじゃないんだろ？」

「ですがウィル様のほうが……」

「僕はまだ大丈夫。これくらいなら耐えられる」

そうは言ってもギリギリだった。体を動かしていないせいもあって、凍てつく寒さが体を蝕んでいく。

体感だが、僕の体の限界は残り一時間くらいと見て良いだろう。

僕は立ち上がる。

「ウィル様？」

「進もう。このままこもっていたら、いずれ体が動かなくなる」

「それは無茶ですよ！ 外はまだ吹雪いているんですよ！」

「そうだけど……ここにいっても寒さは凌げないんだよ」

僕は極限の寒さのせいで、冷静に物事を考えられなくなっていた。そんな僕をホロウは必死で止めようとする。

「一旦落ち着いてください！ ウィル様の魔法で、その入り口を塞ぐことはできますよね？」

「それはできるけど」

「塞いでしまえば、外からの寒さは凌げます。完全に塞ぐと空気の通り道がなくなるので、少しは隙間を空けないといけません、それでも今よりずっとマシになると思います」

「確かに……やってみるよ」

ホロウに諭され、僕は洞窟の入り口を八割くらい塞いだ。

すると、彼女の言ったように多少だがマシになった。

体の震えも、しばらくしたら落ち着いた。

「ありがとう、ホロウ。君に助けられた」

「いえ、私はただ意見を言っただけですから」

「それがなかったら、僕は外で凍え死んでいたよ」

普段の自分なら、もつと冷静な判断を下せただろうか。

入り口を塞ぐという簡単な案なら、最初に出てもおかしくなかったはずだ。

判断力が鈍っていたことを自覚させられる。たかが寒さと侮っていた自分が愚かだったと反省した。

「とはいえ、この程度じゃユノは起きてくれないか」

「そのようですね」

ユノは未だにぐっすりと眠っている。それこそ数日徹夜した後くらい、深く眠っているように見える。

「ホロウの故郷は、寒さ対策はしているんだよね？」

「もちろんです。室内なら、コートがいらないくらい暖かいですよ」

「だったら、そこまでたどり着ければユノも目覚めるかな」

希望を口にしながら、僅かに開いた隙間から外を見る。

吹雪はまだ収まる気配がない。持ってきた小さな時計で時刻を確認すると、すでに午後七時を回っていた。

「今日はここで一夜を過ごすことになりそうだね」

「そのようですね。夜は昼中よりずっと気温が低いので、気をつけないと」

「ならもつと近づこう。そうすれば、今より暖かいでしょ？」

「……はい」

僕は薪のすぐ傍らで肩を寄せ合った。

眠っている間には特に体温が落ちやすいから、こうしていたほうが安全だ。

ユノは僕の膝の上で眠っている。隣で寄り添うホロウの頬が、赤く染まっていることに僕は気付いた。

2 白狼しろおおかみと狼獣かたわ人

僕らは雪山の洞窟で寄り添いながら朝を迎えた。

入り口の隙間から外を覗き込む。吹雪はやんでいなさそうだ。多少弱まったようにも見えるが、冷たい風が吹き続けている。

「どうしましょう。もう少し待ってみますか？」

僕はホロウに頷いてみせた。

「そうだね、弱まるまで待ってみようか。これじゃ視界が悪くて進めないだろうし」
現在の時刻は朝の六時半。

太陽が昇ったばかりで、日没までは時間が残されている。

体の震えは止まっているし、焦る必要もない。僕は暖を取りながら、吹雪が弱まるまで待った。

二時間後――

目論見通り吹雪が弱まってきた。

まだ多少は雪が舞っているけど、もう吹雪とは呼べないくらいだ。

視界も良好で、これなら方向を見失わずに進める。そう判断した僕たちは、腰を上げて外へ出た。ユノは引き続き僕がおぶっている。

「うう……やっぱり外は一段と寒いね」

慣れたといえど、洞窟の外は依然として耐え難い寒さだった。

ユノをおぶっているおかげで背中は多少マシだけど、露出している頬は今にも凍ってしまいそうだ。

「案内頼むよ、ホロウ」

「はい、お任せください」

僕はホロウの先導に従って山道を進む。

昨日の吹雪で新しく積もった雪は軽くて柔らかい。

足を一歩踏み出すたびにズボツと沈むから、とても歩きにくい。

これだけでも十分に体力が削られる。そんな道をスイスイと歩いていくホロウを見て、感心しながら僕は言う。

「昨日もそうだったけど、すごいよね、ホロウは。疲れないの？」

「すごくなんかいいですよ。このくらいの雪なら私の一族は、子供でも走り回れちゃいますからね」

「走り回るか……ホロウもそうだったの？」

「はい。こう見えて私、狩りも得意なんですよ？」

「そうなの？ というか、こんな雪山に生き物がいるのかい？」

「もちろんいますよ。雪兎に熊、狸とか鹿もいましたよ」

「熊は結構危険そうだな。一人で狩ったの？」

「まさか。熊を狩るときは一人じゃなかつたですよ。他の皆もいたし、それから——」

そのとき、視線を感じた僕らは立ち止まった。

話しながらで今まで気付かなかつたけど、吹雪はすっかりやんでいる。

道もまっさらな雪道から、岩や倒木がゴロゴロしているような悪路になっていた。その岩陰から、複数の生き物の気配を感じる。

「ホロウ」

「はい」

僕とホロウは身を寄せ合い、視線を感じるほうを見つめながら数歩後ずさる。

この気配は人じゃない。

野生動物か……もしくは魔物か。

敵意は今のところ感じないけど、警戒はしているみたいだ。岩陰から僕らを観察しているらしい。場所は大体把握できているけど、姿までは確認できないな。

さて、どうする？ まだ襲ってはこないけど、もし魔物だったら戦いになる。ユノをおぶって、ホロウを守りながら戦えるか。いいや、やれるやれないは問題じゃない。僕はごくりと息を呑む。

そして——岩陰から隠れていた彼らが顔を出した。

雪景色に同化するほど真っ白な毛並みと、鋭い牙を持った獣。一匹、二匹、三匹……とどんどん数を増やしていく。

「あれは——狼？」

現れた白い狼たちは、ちょうど十匹。

魔物ではなかったようだ……と、安心してる場合でもない。

狼は人を襲う獣の一種だ。

僕らを獲物と認識しているのなら、今にも襲ってくるかもしれない。彼らは一歩、また一歩とこちらへ近づいてくる。僕は警戒を強める。

「ホロウ、僕の後ろに隠れるんだ」

「待つてください！ あれは……」

ホロウは目を凝らして一匹の狼を見つめた。

僕には何を確認しているかわからないけど、視線の先は一番前にいる狼だ。ホロウはしばらく眺めた後、はっと何かに気付いたような反応を見せる。

「もしかして！」

「ホロウ!?」

彼女は僕の前に出て、無防備に狼に近づいていく。

「危ないよ！」

「大丈夫です」

引き止めようとした僕に、ホロウはそう応えた。いざというときのために変換魔法を準備していたけど……

ホロウが近づくと、一匹の狼が進み出て、優しい声で鳴きながら擦り寄った。

「やっぱり……お前だったんだね、ラビ」

「クウーン」

ホロウと狼の様子に、僕は困惑する。

「えっ……ええ？ どういうこと？」

「安心してください、ウイル様。この子は野生の白狼じゃないです」

白狼というのがこの狼の種類らしい。

しかし、野生でないというのは？

「えっと、簡単に説明させていただくと、この子たちは私の故郷で一緒に暮らしている仲間なんですよ」

ホロウによると、彼女の故郷では、白狼を狩猟しかりやうのパートナーとして飼かいならしているらしい。

僕らの前に現れたのもその一部で、ホロウにじゃれているのがラビという名前のようだ。ラビはホロウが幼い頃に生まれた白狼で、彼女が故郷を出るまではずっと一緒にいたという。

「でも、どうしてここに？」

「おそらく見回りの最中だったんだと思います。もう村が近いですからね」

「そうだったのか！」

話に夢中になっていて、自分がどのくらい歩いていたのか気付いていなかった。

ホロウはラビに優しく話しかける。

「久しぶりだね、ラビ。ずっと会いたかったよ」

ラビの顔に頬ずりするホロウ。

ラビも嬉うれしそうに尻尾しっぽを振っている。

微笑ほほえましい光景に、寒い外気に反して温かさを感じた。

僕らはラビと一緒に、彼らがやってきた道に行く。

この頃には天気もすっかり良くなり、空には太陽が見えるようになっていた。岩と岩の間を抜け、固く踏み込まれた雪道を進む。

そしてついに――

「ウイル様、ここが私の故郷――ウエスト村です」

ホロウが右手を村のほうに掲かげて紹介するように言った。

漆うるしを塗ぬったような黒い柵さくに囲まれ、赤茶色の木造建築が立ち並ぶ。

真っ白な雪景色ばかり見続けたせいもあって、建物や柵の色がより濃こく見える。

ラビが帰還きかんを知らせるように吼ほえた。

すると、建物の中からゾロゾロと人影が現れた。ホロウと同じ灰色の髪をした狼人の男性や女性、子供や老人。

彼らは、僕らの存在に気付いて目を見開いた。

「……ホロウ？ ホロウなのか？」

「おじさん！」

一人の男性が驚いたようにホロウの名を口にした。ホロウも彼を見つけ、声を上げる。男性はホロウの隣に立つ僕の存在にも気付いたみたいだ。

「あなたは……」

「初めまして。僕はウィリアム、見ての通り人間です」

「人間……」

「突然で恐縮なのですが、少し僕の話聞いてはもらえないでしょうか？」

男は険しい表情を見せた。

人間という単語に反応したのがよくわかる。

こんな人里離れた雪山に住んでいるのは、過去に人間と大きく揉めたからではないか。

そういう予想もしてはいたけど、この反応を見る限り、当たっていたらしい。

僕は隣にいるホロウへ視線を向け、その表情を確認して息を呑む。

「ひとまず中へどうぞ。まずは暖まってください」

「ありがとうございます」

男性は僕らを警戒しつつも、室内へ案内してくれた。部屋へ一步入った瞬間に、外との

違いを実感する。

「暖かい……こんなに違うものなのか」

「木が特別なんですよ、ウィル様」

「木？ この赤茶色の木のこと？」

確かにこんな色をした木は見たことがない。

「レッドウッドという木です。ここからふもとへ下っていくとたくさん生えていますよ」

「レッドウッド……やっぱり聞いたことないな」

「すごい木なんですよ。とつても頑丈だし、保温作用もあるんです」

保温作用？

そうか、だから床がこんなにも暖かいのか。

暖炉の温もりが部屋の中に広がって、天井や壁がそれを閉じ込めている。この部屋の中なら、コートもいらさないんじゃないかな。

「こちらへおかけください」

僕は案内された椅子に腰かける。

若い狼人が人数分の温かい飲み物を持ってきてくれた。

ユノはまだ起きないけど、この環境ならしばらくすれば目覚めるだろう。ユノには僕ら

が村民と話をしている間、ベッドで横になってもうらうことにした。

全員が落ち着くと、最初に先ほどの男性が口を開いた。

「本当に……ホロウなんだね？」

「はい」

「そうか、そうか……またこうして会える日が来るとはなあ」

彼はしんみりと言った。彼女が村を出てからの三年間を、じっくり感じているようだった。

「また会えて嬉しいよ」

「私もです。セレクおじさん」

ホロウによれば、彼はこの村を治めている村長さんで、ホロウの育ての親らしい。

ホロウは今日までの経緯を彼に話した。

セレクはそれを時に悲しそうな表情を浮かべ、時に嬉しそうに微笑みながら聞いていた。

「大変だったんだね。だが、こうして元気な姿を見られて良かったよ」

「うん。それも全部、ウイル様のおかげなんだよ」

ホロウが僕に視線を送る。

それを追うように、セレクが僕に目を向ける。

「ウイリアムさん……でしたね。ホロウを助けていただき、ありがとうございました」

「頭を上げてください。僕はただ好きでやっているだけですから」

「そう言えるあなたは、とても優しい心の持ち主なのでしょうね」

セレクが頭を上げ、僕と視線を合わせる。

ああ、良かった。最初は警戒されていたようだけど、ホロウと話したおかげか、その警戒心もなくなっている。

セレクが目がとても穏やかになった。

「それでお話というのは？」

「はい。少し長くなりますが、聞いていただけますか？ 僕の目指す街について」

それから僕は、亜人と人間が共生する街を造るという理想を語った。それが冗談でもなんでもなく、本気だということを強調しながら。

セレクは驚く様子もなく、なぜか納得したような表情で聞いていた。僕が全て話し終えると、彼はこう口にする。

「やはりあなたは特別な人間の方ですね。そんな理想は、我々でも考えたことがありますせんでした」

彼らはかつて、暮らしていた集落を人間に奪われた経験があるそうだ。

それ以来、数十年にわたってこんな雪山の厳しい寒さに耐えながら生活している。人間を恨む気持ちがあるのだと申し訳なさそうに口にするセレクに、僕はそれでも言う。「僕の理想は、絵空事に聞こえるかも知れません。だけど必ず実現させてみせます。どうか……皆さんにもご協力していただけないでしょうか？」

「もちろんですよ。あなたの理想が叶うなら、我々にとつても最高の環境になる」

セレクはあっさりとして了承した。

あまりに簡単に返答するから、僕のほうが驚いてしまった。

「我々も、好きでこんな場所で暮らしているわけではありませんからね。皆にとつても良い話だと思います」

簡単に口にしたようで、色々な葛藤があるのだろう。セレクの声からは迷いを振り払うような決意が感じられた。

村を率いる長として、最善の行動はなんなのか。

それを考えての決断だったのかもしれない。ならば僕は、その決断が正しかったと思えるように、精一杯の努力をするべきだろう。

3 青憐華

せいらんか

セレクの承諾は得たものの、眠っているユノは依然目を覚まさない。

寒さにさらされていた時間が長かったせいだろう。

もしかすると夕方くらいまで目覚めないかもしれないな。

そういうわけで屋敷へ戻れない僕らは、雪山での暮らしについてセレクから教えてもらうことにした。

これから僕の領地も寒くなるし、色々聞いておいて損はないだろう。

「食料はどうしているんですか？ 狩猟だけじゃ限界があると思うんですが」

「その通りです。ここは極寒の地ですから、生息している動物にも限りがありますし、狩りつくすわけにはいきませんからね。さすがに魔物は食べられませんし」

「やっぱり魔物もいるんですね……ここは襲われたりしないんですか？」

「今のところはありませぬね。村を囲っている柵は見てもらえましたか？ あれが魔物避けになっているんですよ」

柵に塗られていたのは漆だという。

ただ、漆に魔物避けの効果があるのではなく、この地域の魔物は漆黒という色を嫌うらしい。しかし、理由は定かではないそうだ。

それでも、とセレクは続ける。

「さすがにドラゴンには通じないと思いますか？」

「ドラゴン!? この辺りにはドラゴンがいるんですか?」

「はい。もつと山頂付近に行けば、氷を司るドラゴンが生息しています」

ドラゴン——現存する魔物の中でも最上位に位置する化け物。

僕も資料でしか見たことがないけど、ワイバーンとは比較にならないくらい大きくて、一匹で王都を壊滅させられる個体もいるという。恐ろしいと感じる一方で、一度で良いからこの目で見たいとも思っていた。

「おっと、話がだいたいぶれてしまいましたね。食料について、でしたか?」

「あつ、はい。そうですね。狩猟が駄目なら、どうしているのかと」

「畑で野菜も栽培していますよ」

「野菜? こんなに寒くても育つんですか?」

「ええ、野菜にも色々種類がありますから」

白菜、キャベツ、ネギ、ホウレンソウなど。強烈な寒さにも耐えうる野菜を選んで栽培しているらしい。

ラインナップだけ見ると、よく鍋で活躍する野菜ばかりだ。

なるほど、それなら僕らの畑でも同じようなものを栽培していこうかな。そうすれば現在育てているものとあわせて、一年を通して色んな野菜を収穫できるし。

「あとで畑を見せてもらえませんか?」

「もちろん構いませんよ。よければ、収穫したものを一緒にそちらへ持っていきます」

「助かります」

きつとソラたちが喜ぶぞ。料理の幅が広がるってね。

そんな話をしていると、奥の部屋から足音が聞こえてくる。

扉が開いて姿を見せたのは、寝起きのユノだった。

僕は目をこすりながら歩いてくるユノに声をかける。

「おはよう、ユノ。珍しく寝ぼすけだったね」

「うむ……おは……よう?」

どうやらまだ寝ぼけているらしいユノは、僕の隣に座った。僕らはうとうととしている彼女がちゃんと目覚めるまで待つことに。

「本当にスマンかった……今回のワシは、完璧に足手纏いじゃったな」
 徐々に意識がはっきりしてきた彼女の第一声は謝罪だった。とても申し訳なさそうな顔
 で頭を下げる。

「謝らないですよ。普段は君に頼りつきりだし、このくらいはおあいこだからさ」

「いや情けない……ワシともあるうものが、寒さ程度に負けてしまうと……ホロウ、主
 にも迷惑をかけたな」

「迷惑だなんてそんな！ ウィル様のおっしゃる通り、開拓ではユノさんに助けられては
 かりでしたから、それに比べれば些細なことですよ」

「うう……そう励まされると逆に恥ずかしいのじゃあ……」

頬を赤くするユノ。

ともかく、これでようやく帰れるな。

早速ユノに扉を生成してもらい、僕らは一旦屋敷へ戻ることにした。セレクたちの移動
 は、一週間ほど準備してから行うという話でまとまった。

「では行こ……つくしゅん！」

「大丈夫？」

「まだ寒気が少し残っているようじゃ……くしゅん！」



「風邪かぜを引いてしまったのでは？」

「かもしれない」

ホロウの質問にユノが鼻水を吸すすりながら答えた。

神祖でも風邪かぜって引くんだ……と思いつつ、僕の頭にちよつとした疑問がふと浮かぶ。

「セレクさん、病気になったときはどうされているんですか？」

風邪に限らず、世の中には様々な病気が存在する。

軽いものなら魔法でなんとかできるけど、重い病気は難しい。

こんな山奥では、薬を買いに行くことはできない。

自分たちで調合するにも、この環境で素材採取さいしゆは厳しいだろう。

「軽い風邪や疲労なら、ふもとまで下りれば薬草が生えていますから、それを採取して使
うんです。もっと重い病気の場合は、これを使っています」

セレクは棚たなから小瓶を取り出した。

小瓶には美しい水色をした液体が入っている。

「これは？」

「いわゆる万能薬です。この山の山頂に、珍しい青い花があって、それを元に作ったもの
なんです。まだ数十本は残っていますが」

立ち読みサンプル はここまで

「そんなに？ 珍しい花なの？」

青い花というのは、そこまで大きな花なのだろうか。

僕はセレクに尋ねる。

「大きさは手のひらに載のるくらいですよ。ですが一輪いちりんあれば、この万能薬が百本は作れま
すから」

一輪いちりんで百本も……それは中々お得なのでは？ と思った僕は、セレクに重むねて質問した。

「ちなみに、最近さいきんは採取さいしゆできましたか？」

「いいえ」

なるほど。これはどうやら、帰るにはまだ早いらしい。

「セレクさん、その花はなって僕ぼくが採とりに行つても問題ないでしょうか？」

「えっ、それはまあ……我々のものというわけではありませんで」

「それなら、今から採りに行つてきます」

「今からですか!？」

「ええ」

僕の領地に治癒魔法ちゆまほうを使える者はいない。

薬師やくしもいないから、もし病やまにかかれば領地の外まで治療ちりやうに行くか、薬を調達してこ